

4.14

[木]

第557回 定期演奏会

サントリーホール／19時開演

Subscription Concert, No. 557

Thursday, 14th April, 19:00 / Suntory Hall

指揮／下野竜也

(首席客演指揮者)

Principal Guest Conductor

TATSUYA SHIMONO

.....

P. 6

テノール／ロビン・トリッチュラー

Tenor

ROBIN TRITSCHLER

.....

P. 9

合唱／二期会合唱団

Chorus

NIKIKAI CHORUS GROUP

.....

P. 9

合唱指揮／富平恭平

Chorusmaster

KYOHEI TOMIHIRA

コンサートマスター／長原幸太

Concertmaster

KOTA NAGAHARA

池辺晋一郎

多年生のプレリユード

[約15分]

.....

P. 12

SHIN-ICHIRO IKEBE / Perennial Prelude for Orchestra

ベートーヴェン

交響曲 第2番

ニ長調 作品36

[約32分]

.....

P. 13

BEETHOVEN / Symphony No. 2 in D major, op. 36

I. Adagio Molto – Allegro con brio

II. Larghetto

III. Scherzo : Allegro

IV. Allegro molto

[休憩 Intermission]

フィンジ

靈魂不滅の啓示

作品29

[約43分]

.....

P. 14

FINZI / Intimations of Immortality, op. 29

I “かつては牧場も森も小川も” — II “虹はかかつては消え”

— III “いま、鳥は歓びの歌を囀り” — IV “祝福された生きとし生けるものよ、私は聞いたよ”

— V “人の誕生はただ眠りと忘却” — VI “大地はみずからの喜びで膝の上を満たし”

— IX “歓ぶがよい、燃えさしのなかで” — X “さあ歌え、鳥たちよ、高らかに歌え、歓びの歌を”

— XI “泉よ、牧場よ、丘よ、森よ”

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [協力] **アフラック** (アメリカンファミリー生命保険会社)
 〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



4.19

[火]

第591回 名曲シリーズ

サントリーホール／19時開演

Popular Series, No. 591

Tuesday, 19th April, 19:00 / Suntory Hall

指揮／下野竜也

(首席客演指揮者)

Principal Guest Conductor

TATSUYA SHIMONO

.....

P. 6

ソプラノ／エヴェリーナ・ドブラチェヴァ

Soprano

EVELINA DOBRAČEVA

.....

P. 10

コンサートマスター／小森谷巧

Concertmaster

TAKUMI KOMORIYA

ベルク (フォン・ボリース編)

パッサカリア

[約5分]

.....

P. 22

BERG (arr. VON BORRIES) / Passacaglia

ベルク

歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章

[約20分]

.....

P. 23

BERG / Three excerpts from “Wozzeck”

I. 第1幕第2場&第3場

II. 第3幕第1場

III. 第3幕第4場&第5場

[休憩 Intermission]

モーツァルト

交響曲 第41番

ハ長調 K.551 〈ジュピター〉

[約40分]

.....

P. 25

MOZART / Symphony No. 41 in C major, K. 551 “Jupiter”

I. Allegro Vivace

II. Andante Cantabile

III. Menuetto : Allegretto

IV. Molto Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



4.23 [土]	第186回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No.186 Saturday, 23rd April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
4.24 [日]	第186回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No.186 Sunday, 24th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／山田和樹 Conductor KAZUKI YAMADA **P.7**
 ピアノ／小山実稚恵 Piano MICHIE KOYAMA **P.10**
 コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

オネゲル パシフィック 231 [約7分] **P.26**
 HONEGGER / Pacific 231

グリーグ ピアノ協奏曲 イ短調 作品16 [約30分] **P.27**
 GRIEG / Piano Concerto in A minor, op. 16
 I. Allegro molto moderato
 II. Adagio — III. Allegro moderato molto e marcato

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲 第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] **P.28**
 TCHAIKOVSKY / Symphony No. 6 in B minor, op. 74 “Pathétique”
 I. Adagio – Allegro non troppo
 II. Allegro con grazia
 III. Allegro molto vivace
 IV. Finale : Adagio lamentoso

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 【事業提携】東京芸術劇場

4.29 [金・祝]	第87回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No.87 Friday, 29th April, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
4.30 [土]	第1回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩 大ホール／15時開演 Parthenon Popular Series, No.1 Saturday, 30th April, 15:00 / Parthenon Tama

指揮／ラハフ・シャニ Conductor LAHAV SHANI **P.8**
 ヴァイオリン／佐藤俊介 Violin SHUNSKE SATO **P.11**
 コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] **P.29**
 MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64
 I. Allegro molto appassionato — II. Andante
 — III. Allegro non troppo – Allegro molto vivace

[休憩 Intermission]

マーラー 交響曲 第1番 ニ長調 〈巨人〉 [約53分] **P.30**
 MAHLER / Symphony No. 1 in D major “Titan”
 I. Langsam. Schleppend. – Immer Sehr Gemächlich
 II. Kräftig bewegt, doch nicht zu Schnell
 III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
 IV. Stürmisch bewegt

【主催】読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団（4/29）
 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社（4/30）
 【協力】横浜みなとみらいホール（4/29）

下野 竜也

(首席客演指揮者)

Tatsuya Shimono

モーツァルトの傑作から
フィンジの大作まで
実力派の本領発揮



©読響

正指揮者時代から10年近くに
わたって読響と共に歩んできた
下野が、2017年3月末で首席客
演指揮者を退任する(詳細は44ペ
ージ)。最終年の幕開けとなる今
回、幅広いレパートリーと独自の
選曲で聴衆をうならせる実力派は、

18世紀古典派の傑作から20世紀の合
唱付き大作まで縦横無尽に腕を振るう。

1969年鹿児島県生まれ。鹿児島大学
教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学
部附属指揮教室、イタリア・シエナのキ
ジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィ
ルの指揮研究員となり朝比奈隆氏ら巨
匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸
術家在外研修員としてウィーン国立演劇
音楽大学に留学中、2000年の東京国
際音楽コンクールと01年のブザンソン
国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、
チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送

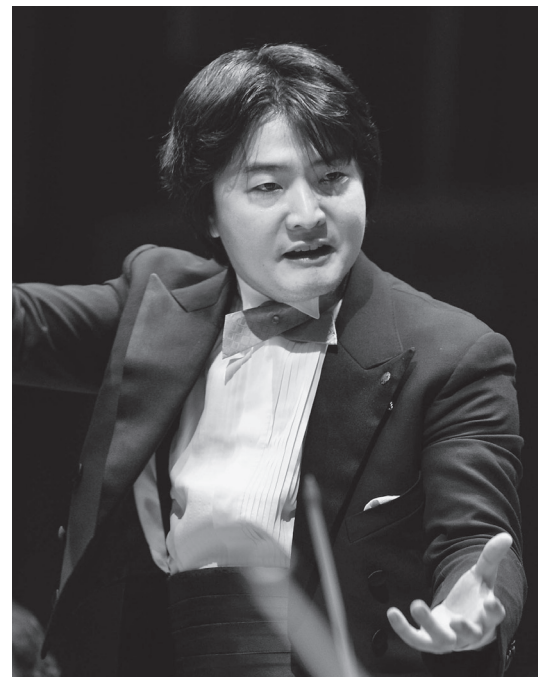
響、ローマ・サンタチェチーリア管などと
共演し国際的に活躍するほか、上野学
園大学教授として後進の指導に当たっ
ている。また、出光音楽賞、渡邊暁雄
音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレ
ッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリ
アル基金賞、芸術選奨文部科学大臣
賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励
賞など受賞も数多い。14年9月には読
響とカレル・フサの〈この地球を神と崇
める〉を日本初演し、読響をミュージッ
ク・ペンクラブ音楽賞受賞に導いた。

◇ 4月14日 定期演奏会
◇ 4月19日 名曲シリーズ

山田和樹

Kazuki Yamada

欧州で人気急上昇中の
次代を担う若手筆頭格
読響は2年ぶり



©読響

歴史と伝統を誇るヨーロッパの
名門、スイス・ロマンダ管の首席客
演指揮者を務める期待の若手。今
年9月からは、モナコのモンテカ
ルロ・フィルの芸術監督兼音楽監
督に就任予定。今回はチャイコフ
スキーの〈悲愴〉を披露する。

1979年神奈川県生まれ。東京芸術大学
指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。
2009年、ブザンソン国際指揮者コンクール
優勝および聴衆賞受賞を機に欧州でのキャ
リアをスタートさせ、BBC響、パリ管、フィ
ルハーモニア管、ケルンWDR(西ドイツ放
送)響、ベルリン放送響、サンクトペテルブル
ク・フィル、チェコ・フィル、バーミンガム市響
など一流オーケストラとの共演を重ねている。

国内の主要オーケストラにも客演しており、
現在は日本フィルの正指揮者、仙台フィルと
オーケストラ・アンサンブル金沢のミュージッ
ク・パートナーなどのほか、東京混声合唱団
音楽監督や自身が学生時代に創設した横浜

シンフォニエッタの音楽監督も務めている。
また、小澤征爾の代役として12年のサイト
ウ・キネン・フェスティバルでオネゲルの劇的
オラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を
振ったほか、同年のサントリー芸術財団サマ
ーフェスティバルでクセナキスの〈オレスティ
ア三部作〉を指揮し、大きな成功を収めた。

録音活動にも意欲的に取り組んでお
り、PENTATONE、EXTON、fontec
の各レーベルから管弦楽曲や合唱曲な
ど、多数のCDをリリースしている。

読響には14年以來の客演となる。

◇ 4月23日 土曜マチネシリーズ
◇ 4月24日 日曜マチネシリーズ

ラハフ・シャニ

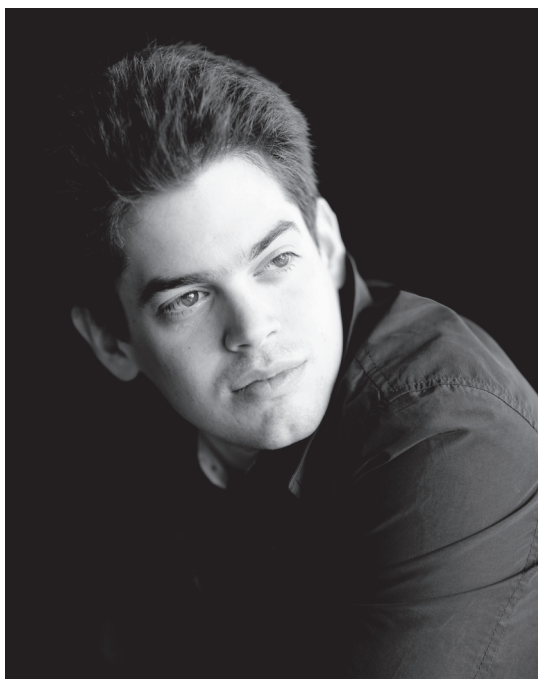
Lahav Shani

マーラー〈巨人〉を指揮して
ウィーン・フィルにデビュー
旬の若手が読響初登場

世界的に注目されているイスラエルの若手が読響に初登場する。2015年末にウェルザー＝メストの突然の代役でウィーン・フィルに呼ばれ、今回のプログラムと同じマーラーの交響曲第1番〈巨人〉を指揮。聴衆からスタンディング・オベーションを受け、批評家から絶賛されたことは記憶に新しい。読響ではどのような棒さばきを見せるか。

1989年イスラエルのテルアビブ生まれ。地元でピアノを学んだ後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学でピアノ・指揮を修め、近年はバレンボイムに師事している。2013年、ドイツのグスタフ・マーラー国際指揮者コンクールで第1位となって注目され、14年にギーレンの代役としてシュターツカペレ・ベルリン（ベルリン国立歌劇場管弦楽団）でセンセーショナルなデビューを飾った。

今までにロサンゼルス・フィル、シュターツカペレ・ドレスデン、ウィーン響、オ



©Marco Borggreve

ランダ放送フィル、フィルハーモニア管、チェコ・フィル、バーミンガム市響、ロイヤル・リヴァプール・フィルなど欧米の一流オーケストラに客演している。

イスラエル・フィルとは07年にピアニストとして共演して以来、密接な関係を築いており、13年にはシーズン開幕コンサートを指揮した。今後の予定では、16年末にベルリン国立歌劇場で〈ラ・ボエーム〉を、また17年にはシュターツカペレ・ベルリンを指揮する予定。17-18年シーズンよりウィーン響首席客演指揮者に就任予定。

◇ 4月29日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

◇ 4月30日 パルテノン名曲シリーズ

A rtist of the month

今月のアーティスト



©Garreth Wong

テノール ロビン・トリツチュラー

Tenor Robin Tritschler

アイルランド生まれ。次世代を担うリリック・テノールとして注目を集め、イギリスを中心に幅広く活躍している。ウェルズ・ナショナル・オペラで〈セビリアの理髪師〉〈サロメ〉〈コジ・ファン・トゥッテ〉などに出演。〈ヴォツェック〉でロンドンのロイヤル・オペラにデビューした。また、ロンドンのウイグモア・ホールに定期的に出演し、シューベルトやブリテンの歌曲を歌っている。今までにリヨン国立管、フランス放送フィル、ロンドン・フィルほか、また指揮者ではネゼ＝セガン、ヘレヴェッヘ、ユロフスキらと共演している。

読響とは今回が初共演。

◇ 4月14日 定期演奏会

合唱 二期会合唱団

Chorus Nikikai Chorus Group

合唱指揮 富平恭平

Chorusmaster Kyohei Tomihira

日本で最も歴史の古いプロのオペラ合唱団として、二期会誕生翌年の1953年に結成された。二期会のオペラ公演を活動の中心に据え、ダイナミックな歌唱と演技は高く評価されている。ほかにも国内の主要オーケストラへの客演や独自のコンサート開催など、その活動は多岐にわたる。

2015年は宮本亜門演出で話題を呼んだモーツァルト〈魔笛〉やR. シュトラウスの〈ダナエの愛〉、J. シュトラウスIIの〈ウィーン気質〉、16年に入ってからヴェルディ〈イル・トロヴァトーレ〉などで水準の高い合唱を聴かせている。

◇ 4月14日 定期演奏会



©Dima Tarasenko

ソプラノ エヴェリーナ・ドブラチェヴァ

Soprano Evelina Dobračeva

ロシア生まれのドラマティック・ソプラノ。ロシアで指揮などを学んだ後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学で声楽を修めた。これまでにバイエルン国立歌劇場でムソルグスキー〈ホヴァンシチナ〉、ヴェルビエ音楽祭でモーツァルト〈コジ・ファン・トゥッテ〉などに出演。2014年にはラフマニノフの歌曲を歌ってロンドンのウィグモア・ホールにデビューした。

ベートーヴェンからショスタコーヴィチまで幅広いレパートリーを誇り、特にブリテンの〈戦争レクイエム〉の独唱で高い評価を得ている。読響とは初共演。

◇ 4月19日 名曲シリーズ



©ND CHOW

ピアノ 小山実稚恵

Piano Michie Koyama

人気・実力ともに日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー・コンクールとショパン・コンクールに入賞以来、常に第一線で活躍し続けている。

近年の活動では2006年から取り組む「12年間・24回リサイタル・シリーズ」が全国6都市で進行中。また、15年から仙台で始めた東日本大震災の復興プロジェクト「こどもの夢ひろば“ボレロ”」のゼネラル・プロデューサーを務める。ソニーから多数のCDが出ており、最新盤は「シューベルト：即興曲集」。05年度に文化庁芸術祭音楽部門大賞、15年度には同部門優秀賞を受賞した。

◇ 4月23日 土曜マチネシリーズ

◇ 4月24日 日曜マチネシリーズ



©Yat Ho Tsang

ヴァイオリン 佐藤俊介

Violin Shunsuke Sato

日本の次世代を担う若手ヴァイオリニスト。幅広いレパートリーと、モダンからピリオドまで多彩な演奏スタイルを手中に収め、コンチェルト、リサイタル、室内楽と幅広く活躍している。

1984年東京生まれ。幼少時に渡米し、ジュリアード音楽院などで学んだ後、ヨーロッパに拠点を移した。現在はデン・ハーグ在住で、コンチェルト・ケルンとオランダ・バッハ協会のコンサートマスターを務める。これまでにベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団、バイエルン放送響、フランス放送フィルなどと共演。CDに「テレマン：12の幻想曲」(ライブノーツ)など。

◇ 4月29日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

◇ 4月30日 バルテノン名曲シリーズ

4.14 [木]

等松春夫 (とうまつ はるお)・防衛大学校教授／英国エルガー協会会員

池辺晋一郎
多年生のプレリユード

作曲：2010年／初演：2011年1月22日、東京／演奏時間：約15分

未来を感じさせる生命力の表現

読売日本交響楽団の第500回定期演奏会を記念して委嘱され、2011年1月22日に下野竜也指揮の同交響楽団により初演された。タイトルの「多年生」とは、草木の一つの個体が複数年にわたって生存することを意味する。越冬し春が来るたびに萌芽^{ほうが}し成長して開花していく、しなやかで強^{きょうじん}靱な多年生の植物のイメージが、オーケストラの歴史に重ね合わされている。作曲者の池辺晋一郎(1943年～)は、初演プログラムで次のように語っている。「地を這^はうような、あるいは重く沈潜していくような頑迷な『現代音楽』ではなく、明快なエネルギーが噴出し、多年生植物の上にさらに広がる未来を感じ

させるような音楽にしたいと思った」曲は冒頭の上行跳躍からドラマティックに始まり、このモチーフが随所で変奏される。絡み合うような管楽器の旋律は春の植物の萌芽^{ほうが}を思わせる。中間部では怪獣の彷徨^{ほうこう}を思い起こさせる下降旋律や、叙情的な弦の調べがとりわけ印象的である。多彩な打楽器群の意表を突くような活躍が時にユーモラスで視覚的にも楽しく、全曲は生命力に満ちたトゥッティで華やかに結ばれる。高校生の頃に読響設立に向けた練習演奏会を見学して以来、このオーケストラの歴史を見守ってきた作曲者からのオーケストラへのエールである。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3 (バスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、銅鑼、ウッドブロック、鈴、ウィンドチャイム、トムトム、ムチ、マラカス、カバサ、ヴィブラスラップ、フレクサトーン、シロフォン、グロッケンシュピール、チューブラーベル)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

ベートーヴェン
交響曲 第2番 ニ長調 作品36

作曲：1801～2年／初演：1803年4月5日、ウィーン／演奏時間：約32分

聴覚障害の兆候のさなかに作曲

1803年4月5日、アン・デア・ウィーン劇場で開かれた演奏会はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の再起を告げるものであった。交響曲第2番の初演は、このときオラトリオ〈オリーブ山上のキリスト〉、ピアノ協奏曲第3番の初演や交響曲第1番と併せて行われている。

1792年に生地ボンからウィーンへ移ったベートーヴェンは、1801年までに6番までの弦楽四重奏曲、5番までのヴァイオリン・ソナタ、15番までのピアノ・ソナタ、2番までのピアノ協奏曲、バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉、そして記念すべき交響曲第1番を完成させ、新進気鋭のピアニスト・作曲家として名声が高まりつつあった。ところが、悲劇的な聴覚障害の兆候が表れ、ベートーヴェンは1802年、半年余りウィーン郊外のハイリゲンシュタットに籠^{こも}って懊悩^{おうのう}した。その苦悩が「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれる書簡で吐露^{とろ}されたことは有名である。しかし、これは自殺を考え

て再起しようとするベートーヴェンの決意表明であったと最新の研究では考えられている。交響曲第2番は「遺書」を書く直前の1801年から02年にかけてスケッチされ、危機のさなかに完成され、再起を象徴する演奏会で初演されたのであった。

第1楽章 アダージョ・モルトーアレグロ・コン・ブリオ ニ長調。ファンファーレ調のトゥッティで始まる長い序奏に続き、主部ではヴィオラとチェロが躍動的な第1主題を奏する。渦巻くエネルギーからは交響曲第3番〈英雄〉の世界が遠くないことが感じられる。

第2楽章 ラルゲット イ長調。木管と陰りのある弦楽器が対話する静謐な歌である。

第3楽章 スケルツォ：アレグロ ニ長調。交響曲史上初めてスケルツォの名が冠された楽章。

第4楽章 アレグロ・モルト ニ長調。たたみかけるように始まり、動機が次々に積み上げられていく。執拗^{しつよう}なコーダは後の交響曲第5番〈運命〉の終結部を思わせる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

フィンジ 靈魂不滅の啓示 作品 29

作曲：1930年代末～50年／初演：1950年9月5日、グロースター／演奏時間：約43分

自然讃歌と幼年時代への哀惜を歌う

20世紀前半に活動した英国の作曲家ジェラルド・フィンジ（1901～1956）によるテノール独唱、混声合唱、管弦楽のための頌歌^{しょうか}。英国ロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワース（1770～1850）の同名の詩をテキストに用いている。エルガー〈ゲロンティアスの夢〉、ヴォーン・ウィリアムズ〈ドナ・ノビス・パーチェム〉、ウォルトン〈ベルシャザールの饗宴^{きょうえん}〉など、英国近代音楽における管弦楽付き合唱作品の系譜に連なる曲の一つである。

フィンジは1901年、ロンドンでイタリア系とドイツ系のユダヤ人の両親のもとに生まれた。ロンドンの王立音楽院の教師を務めたこともあったが、フィンジの本質は英国の田園紳士（カントリー・ジェントルマン）だった。30代初めから田舎に移り住み、希少種リンゴの栽培や英文学の古書収集のかたわら、ゆっくりとしたペースで作曲を続けた。良い意味で折衷^{せっちゅう}的な楽想と作風は、バッハ、エルガー、ヴォーン・ウィリアムズ、ホルスト、ウォルトン、ブリスらの影響を受けている。また、ニューベリー弦楽合奏団を

主宰し、みずから発掘・研究したりチャード・マジやウィリアム・ボイスら18世紀英国の作曲家たちの埋もれた弦楽作品の蘇演と普及に努めた。〈ピアノと管弦楽のための大幻想曲とトッカータ〉、〈クラリネット協奏曲〉、死の直前に初演された〈チェロ協奏曲〉が比較的知られているが、作品の大半は声楽曲と合唱曲である。詩を中心とする英文学の熱烈な愛好者であったフィンジは、とりわけトマス・ハーディ（1840～1928）に傾倒し、その詩に基づく歌曲を43曲も作っている。そのハーディと並んでフィンジが愛好したのがワーズワースだった。湖水地方の自然を讃えるその作風は、田園紳士フィンジの気質と重なる。

しかし、ワーズワースの「靈魂不滅^ひの啓示」にフィンジが魅かれた点はたんなる自然讃歌ではなく、過ぎ去った幼年時代への哀惜^{あいせき}であった。詩では人が幼い日々^{せっちゅう}に持っていた清浄な魂が、大人になるにしたがい失われる悲しみが語られており、フィンジの作品中でもとりわけ熱狂的な自然讃歌と内省的な喪失感が交互に歌われるのが印象

的。〈靈魂不滅の啓示〉は1930年代後半に着手されたが、第二次世界大戦で作曲は中断され、1945年から1950年にかけて完成された。作品は恩人であるヴォーン・ウィリアムズの夫人アデリーンに献呈され、初演は1950年9月5日にグロースターで開かれた三教区合唱音楽祭（Three Choirs Festival）において行われた。18世紀に起源を有し現在も続くこの音楽祭はウースター、グロースター、ヘリフォードの三都市の回り持ちで毎年開催され、ハイライトは大聖堂を会場とした英国の管弦楽付き合唱作品の演奏である。なお、以下のローマ数字はワーズワースの原詩の連の番号であるが、Ⅶ、Ⅷはフィンジによって省略されている。

“アンダンテ・ソステヌート（前奏曲）”は牧歌的なホルンの呼びかけで始まる。このホルンの旋律は曲の核心部であるⅤ～Ⅵ～Ⅸ連でも現れ、全曲を統一する役割を果たす。Ⅰ“かつては牧場も森も小川も”ではヴァイオリン独奏に導かれてテノール独唱が歌い始め、ノスタルジーに満ちた木管が彩りを添える。Ⅱ“虹はかかつては消え”をア・カペラの合唱が歌い始め、ホルンが縁取り、テノール独唱が加わる。引き延ばすような高弦は虹を表す。突

然、打楽器群が高鳴ると、管弦楽のみの短い間奏が始まる。カスタネットや木琴のフレーズが印象的である。ファンファーレ風の金管群に続いて合唱がⅢ“いま、鳥は飲^{さえず}びの歌を囀^{ほうふつ}り”、とハイドンの〈天地創造〉を彷彿させる自然讃歌を歌い始める。多彩でダイナミックな管弦楽と合唱の扱いには同世代のウォルトンの〈ベルシャザールの饗宴〉との近似性が見られる。しかし熱狂は続かない。やがて管弦楽の総奏により劇的なⅣ“祝福された生きとし生けるものよ、私は聞いたよ”が始まるが、すぐにエルガーの〈ゲロンティアスの夢〉を思わせる内省に変わる。曲冒頭のホルンの旋律が再び現れ、曲の核心であるⅤ“人の誕生はただ眠りと忘却”、Ⅵ“大地はみずからの喜びで膝の上を満たし”、Ⅸ“飲ぶがよい、燃えさしのなかで”では、幼少年期には見えたものが大人には見えなくなってしまうことが嘆かれる。再びⅢの自然讃歌の世界に戻り、Ⅹ“さあ歌え、鳥たちよ、高らかに歌え、飲^{さえず}びの歌を”となる。Ⅺ“泉よ、牧場よ、丘よ、森よ”では、フルート独奏やヴァイオリンの叙情的な旋律が小川や日没の美しさを描き、曲冒頭のホルンの旋律と共に、瞑想のうちに全曲は閉じられる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シロフォン、トライアングル、カスタネット、タンブリン、木魚、小太鼓、テナードラム、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、ハープ、弦五部、独唱テノール、合唱



読響—ユース

Fresh flowers ; while the sun shines
warm,
And the Babe leaps up on his Mother's arm :—
I hear, I hear, with joy I hear !

—But there's a Tree, of many, one,
A single Field which I have looked upon,
Both of them speak of something that is
gone :

The Pansy at my feet
Doth the same tale repeat :
Whither is fled the visionary gleam ?
Where is it now, the glory and the dream ?

V

Our birth is but a sleep and a forgetting :
The Soul that rises with us, our life's Star,
Hath had elsewhere its setting,
And cometh from afar :
Not in entire forgetfulness,
And not in utter nakedness,
But trailing clouds of glory do we come
From God, who is our home :
Heaven lies about us in our infancy !
Shades of the prison-house begin to close
Upon the growing Boy,
But He
Beholds the light, and whence it flows,
He sees it in his joy ;
The Youth, who dally farther from the east
Must travel, still is Nature's Priest,

And by the vision splendid
Is on his way attended ;
At length the Man perceives it die away,
And fade into the light of common day.

^{みずみず}
瑞々しい花を摘むいま。陽射しは温
かく、
^{おきなこ}
幼子が母親の腕のなかで伸び上がるいま。
私にはたしかに聞こえる、歓びとともに
聞こえる、
だのに、数多い木々のなかに一本の木と、
私の目に映る一つの野原とがあって、
ともに消え去ったものについて語るのだ。

足もとのパンジーが
繰り返すのも同じ話——
あの幻の輝きはいまいずこに、
あの栄光と夢はいまいずこに。

V

人の誕生はただ眠りと忘却。
生まれ出る魂は生命の星、
一度は没した星、
遙かかなたから渡りきた星。
忘れ去りもせず、
^{あわら}
露な裸身でもなく、
栄光の雲を棚引かせて生まれ出るわれわれの
ふるさとは神、
幼子を包み込む天上。
牢獄の影が垂れ込めるのは
育ち行く少年、
それでも少年は
栄光の光とそれがいずこから射すかを知り
喜々として光を見る。
若者となると、日々、東から遠ざかる
旅を強いられるが、いまだ自然の司
祭であり、
光り輝く光景に
道すがら伴われている。
ついに大人ともなれば、栄光の光は失せ
日々の光の中に融け入る。

VI

Earth fills her lap with pleasures of her own ;
Yearnings she hath in her own natural kind,
And, even with something of a Mother's mind,
And no unworthy aim,
The homely Nurse doth all she can
To make her Foster-child, her Inmate Man,
Forget the glories he hath known,
And that imperial palace whence he came.

IX

O joy ! that in our embers
Is something that doth live,
That nature yet remembers
What was so fugitive !
The thought of our past years in me doth breed
Perpetual benediction : not indeed

For that which is most worthy to be blest :
Delight and liberty, the simple creed

Of Childhood, whether busy or at rest,
With new-fledged hope still fluttering in
his breast : —

Not for these I raise
The song of thanks and praise ;
But for those obstinate questionings
Of sense and outward things,
Fallings from us, vanishings ;

Blank misgivings of a Creature
Moving about in worlds not realized,

High instincts before which our mortal
Nature
Did tremble like a guilty Thing surprised :

VI

大地はみずからの喜びで膝の上を満たし、
大地は特有の願い、
母親のような心、
相応の目的をもって、
育ての親として最善を尽くして
里子として住まう人間に
忘れさせてしまう、過去の栄光と
かつて住まった天上の宮殿のことを。

IX

歓ぶがよい、燃えさしのなかで
火が死に絶えることなく、
人の本性は忘れることなく
過ぎ去るものの残ることを。
過去の歲月への思いが私の心のなかに育み
消えることのない祝福。私が感謝し賞賛する
のは
最も祝福に値すると思われるものではない、
喜びと自由な心、子どもの素朴な信仰のこと
ではない——
子どもは立ち働いても休んでいても
羽毛も初々しい希望が胸のうちに羽ばたくも
のだが。

それとは別に、私は
感謝と賞賛の歌を捧げよう、
子ども時代のあの執拗な問いに対して、
感覚と目に見える物、
抜け落ち、消え去るものに対する問いに
対して。
子ども特有の漠たる不安、
いまだ実在化されぬ世界のなかで動く子ども
特有のもの、
それは高貴な本能、それを見て世俗にまみれ
た大人の性は
不意を襲われて悪事の露見した者のように身
を震わせた。

But for those first affections,
Those shadowy recollections,
Which, be they what they may,
Are yet the fountain light of all our day,
Are yet a master light of all our seeing ;
Uphold us, cherish, and have power
to make
Our noisy years seem moments in the being

Of the eternal Silence : truths that wake,

To perish never ;
Which neither listlessness, nor mad endeavour,
Nor Man nor Boy,
Nor all that is at enmity with joy,
Can utterly abolish or destroy !
Hence in a season of calm weather
Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,
And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore.

X

Then sing, ye Birds, sing, sing a joyous
song !
And let the young Lambs bound
As to the tabor's sound !
We in thought will join your throng,
Ye that pipe and ye that play,
Ye that through your hearts to-day
Feel the gladness of the May !
What though the radiance which was
once so bright
Be now for ever taken from my sight,

Though nothing can bring back

感謝し賞賛しよう、あの原初の感情、
影のように捉えがたい記憶、
たとえそれが何であろうか、
この世の光の源泉となる光、
この世の目に見えるものすべてを統べる光。
われわれを支え、育み、その力で
この世の喧しき歳月をほんの瞬時と化して
もらいたい、
永遠の静寂のなかの瞬時に。かくあれかし、
目覚めた真理よ、

死滅することのない真理よ。
無気力も、もの狂おしい苦闘も、
大人も少年も、
さらに歓びの敵すべても、
棄却し破壊し去ることのできない真理よ。
それだから風の季節には
海辺から遙か遠くにあってなお、
われわれの魂はあの永遠の海を見、
われわれの出自たる海を見、
刹那にそこへ還ることが許され、
子どもたちが岸辺で戯れる姿と、
永久に高鳴る潮騒の音を聞く。

X

さあ歌え、鳥たちよ、高らかに歌え、歓びの
歌を。
幼い子羊は跳びはねるがよい、
まるで小太鼓の音に合わせたかに。
私たちは心のなかで君たちの群れに加わろう、
笛を吹き戯れる君たち、
きょうの日、心から
五月の喜びを感じる君たち。
どうしたというのだ、かつてあんなにも煌め
いた輝きが
いまや私の視界から永久に消し去られたから
といって。

何物も昔を呼び戻せはしない、

the hour
Of splendour in the grass, of glory in the
flower ;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind ;
In the primal sympathy
Which having been must ever be ;

In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering ;

In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind.

XI

And O, ye Fountains, Meadows, Hills,
and Groves,
Forebode not any severing of our loves !

Yet in my heart of hearts I feel your might ;
I only have relinquished one delight
To live beneath your more habitual sway.
I love the Brooks which down their chan-
nels fret,
Even more than when I tripped lightly as
they ;
The innocent brightness of a new-born Day
Is lovely yet ;
The Clouds that gather round the setting sun
Do take a sober colouring from an eye
That hath kept watch o'er man's mortality ;
Another race hath been, and other palms
are won.
Thanks to the human heart by which we live,
Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears.

草に見た輝きと、花に見た栄光とを。

だが悲しむことはやめ、見つけるのだ、
残されたもののなかに、力を。
原初の共感のなかに見つけるのだ、
かつて存在した共感^{とこしえ}は永久にあり続
けねばならぬ。
見つけるのだ、^{ほとばし}迸り出る慰めの心に、
人の苦しみのなかから迸り出る慰め
の心に。

死を見つめる敬虔な心と、
悟りの心をもたらす成熟のなかに。

XI

泉よ、牧場よ、丘よ、森よ、
自然との愛が裂かれるなど不吉な予感^{予感}は捨て
よう。
私は心の奥底で自然の力を感じずる。
私は一つの歓びを失ったが
より恒常的な自然の支配のもとで生きる。
私は幾筋ものせわしく流れ下る小川を愛す、
小川のように足どりの軽やかだった昔にもま
して。
新たな朝の日の無垢な輝きは
いまでも瑞々しい。
落日のまわりに群がる雲に
落ちていた色合いを読み取る眼は
人の死を見つめた眼。
人生の大人の歩みを経て新たな報償^{ほうばい}が得られ
る。
生きるよすがとなる人の心のお蔭により、
人の心の優しさや、歓びや、恐怖のお蔭により、
私にはつつましく開く花でさえしばしば
涙よりも深く底知れぬ感動をもたらす。



ベルク (フォン・ボリース編)

パッサカリア

作曲：1913年(未完)、1999年(編曲)／初演：1999年10月7日、ベルリン／演奏時間：約5分

様々な試みを経て発展する主題

シェーンベルク、ウェーベルンとともに新ウィーン楽派を代表する作曲家アルバン・ベルク(1885～1935)は、ウィーンの裕福な商人の家に生まれた。少年時代から音楽や文学に興味を持ち、15歳から独学で作曲を開始、1904年からシェーンベルクに師事した。歌曲やピアノ曲の創作を経て、1910年代に入ると管弦楽曲を手がけるようになる。〈パッサカリア〉もそのひとつだが、完成させることはできなかった。なぜ変奏曲の一種である「パッサカリア」だったのか。ウェーベルンがシェーンベルクの指導のもとで書いた最後の作品の〈パッサカリア〉op.1(1908)も、意識していたに違いない。

ベルクの未完の〈パッサカリア〉の全貌は、1984年に出版された作品全

集で明らかになった。複数のスケッチに加え、楽器の指示を書き入れた総譜の下書きは、101小節まで進んでいた。ト短調をベースにした21音(10音と11音の2部分から成る)の主題に11の変奏(第11変奏は3小節目まで)が続く。この作品全集の編集主幹ルドルフ・シュテファンは、ひとつの主題が大胆に、様々な試みをして発展していることを指摘した。この研究をもとに、ドイツの作曲家・指揮者のクリスティアン・フォン・ボリースは、〈アルテンベルク歌曲集〉op.4や歌劇〈ヴォツェック〉、前述のウェーベルンの作品を参考にしながら編曲を完成させた。

「ゆっくりと」と指示された音楽は、低弦から暗い色彩で進められる。管打楽器が独特の彩りを添え、冷たく輝くヴァイオリン独奏が印象的だ。

楽器編成／フルート4(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット2、バストランペット、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シロフォン、シンバル、銅鑼、小太鼓)、ハーブ、チェレスタ、弦五部

ベルク

歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章

作曲：1914～1922年(オペラ全曲)、1924年(組曲編曲)／初演：1924年6月15日、フランクフルト／演奏時間：約20分

救いようのない悲劇を題材に

ベルクは、その生涯に二つのオペラ〈ヴォツェック〉と〈ルル〉(一部未完成)を書いた。いずれも今なお世界の歌劇場で上演される、20世紀を代表する作品である。

〈ヴォツェック〉は、本日一曲目の〈パッサカリア〉とほぼ同時期に着手された。オペラの題材を探していたベルクは、19世紀ドイツの作家ビュヒナーの戯曲『ヴォイツェック』の上演を観てオペラ化を思いつく。貧しい兵卒ヴォツェックが痴情のもつれから起こす殺人。戯曲をもとに15場から成る台本を作成し、5場ずつまとめた3幕のオペラが構想された。ベルク自身も第一次世界大戦で徴兵され、短期間ながら軍隊生活の体験もオペラに生かされた。

しかし、1922年に全曲は完成したものの上演の目途が立たない。いくつもの歌劇場に断られ、ピアノ・スコアを自費制作し、作品を売り込んだ。実際、試演までこぎつけた劇場もあったが、上演には至らなかった。そこで、指揮者シェルヘンの助言もあり、まずはオ

ペラ全体に関心を向けてもらおうと3つの断章として、ソプラノ独唱を伴う演奏会用組曲にみずから編曲した。

この組曲では、ヴォツェックを裏切り、鼓手長と浮気するマリーにスポットを当て、彼女の心情を通してこの救いようのない悲劇が描かれる。

第1曲：第1幕第2場&第3場 静かな美しい音楽に続いて、行進曲とともに軍楽隊を引き連れた鼓手長が現れる。マリーは窓辺から目で合図を送り、子供を寝かしつけるために子守唄を歌う。

第2曲：第3幕第1場 マリーは、聖書を読みながらみずからの罪を悔いている。主題と七つの変奏、二重フーガで作られ、シュプレヒシュティンメ(語りと歌の中間の形態)と歌が交替する。

第3曲：第3幕第4場&第5場 ヴォツェックはマリーを殺した現場に戻り、凶器のナイフを沼に捨てようとして溺れてしまう。死体があがったことを子供たちが聞きつけ、見に行こうとするが、マリーの子供は事情が飲み込めない。木馬で遊ぶ子供の様子で幕となる。

楽器編成／フルート4(ピッコロ持替)、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット4(エスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル付大太鼓、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、銅鑼、シロフォン、ルーテ)、ハーブ、チェレスタ、弦五部、独唱ソプラノ

Soldaten, Soldaten sind schöne Burschen!

Komm, mein Bub! Was die Leute wollen!
Bist nur ein arm' Hurenkind
und machst Deiner Mutter doch so viel Freud'
mit Deinem unehrlichen Gesicht! Eia popeia...

Mädel, was fangst Du jetzt an?
Hast ein klein Kind und kein Mann!
Ei, was frag' ich darnach,
Sing' ich die ganze Nacht:
Eia popeia, mein süßer Bu', Gibt mir kein Mensch nix dazu!

Hansel, spann' Deine sechs Schimmel an,
Gib sie zu fressen auf's neu —
Kein Haber fresse sie, Kein Wasser saufe sie,
Lauter kühle Wein muß es sein!
Lauter kühle Wein muß es sein!

„Und ist kein Betrug in seinem Munde erfunden worden“ ...
Herr Gott, Herr Gott! Sieh mich nicht an!
„Aber die Pharisäer brachten ein Weib zu ihm, so im Ehebruch lebte.“
„Jesus aber sprach: So verdamme ich dich auch nicht, geh' hin, und sündige hinfort nicht mehr.“
Herr Gott! Der Bub' gibt mir einen Stich in's Herz. Fort!
Das brüst' sich in der Sonne!
Nein, komm, komm her! Komm zu mir!
„Es war einmal ein armes Kind und hatt' keinen Vater und keine Mutter ... war Alles tot und war Niemand auf der Welt, und es hat gehungert und geweint Tag und Nacht. Und weil es Niemand mehr hatt' auf der Welt ...“
Der Franz ist nit kommen, gestern nit, heut' nit ...
Wie steht es geschrieben von der Magdalena?
„Und kniete hin zu seinen Füßen und weinte und küßte seine Füße und netzte sie mit Tränen und salbte sie mit Salben ...“
Heiland! Ich möchte Dir die Füße salben —
Heiland! Du hast Dich ihrer erbarmt,
erbarne Dich auch meiner! ...

Hopp, hopp! Hopp, hopp! Hopp, hopp!

兵隊さ～ん、兵隊さ～ん みんな色男だねえ！

おいで、坊や！　好き勝手言わせておきな！
お前が可哀想なてなし子だとしても
母さんはとっても嬉しいんだよ
お前の罪深い顔を見ていてもね！　ねんねだよ…

娘さん、さあどうするの？
お父のいない子を産んで！
あら、何の氣にすることがありましょう、
夜通し歌ってあげるのよ——
ねんねんころり、可愛い坊や、誰の施しも受けやせぬ！

坊や、馬車に白馬6頭を、
繋いでもいちど餌おやり——
燕麦ではいけないよ、ただの水でもいけないよ、
冷えたぶどう酒おやりなさい！
冷えたぶどう酒おやりなさい！

「しかしてそのことばには偽りなかりき…」
「神様、神様！ 私を見ないで！」
「しかしバライサイびとら、姦淫に生ける女を
イエスのもとへ連れ来たり」
「だがイエス言い給う——我、汝をも罰せじ、
往け、そして再び罪を犯すまじ！」
神様！ 坊やを見ると心が痛むわ。あっちに行つて！
何よ、偉そうな顔をして！
いいえ、おいで、おいで、こっちにおいで！
「むかしむかし可哀想な子供がおりました、父さん
も母さんもおりませんでした…みんな死んで、この
世に誰もいませんでした。お腹が空いて、昼も夜も
泣いておりました。もう、この世に誰もいなかった
ので…」
フ란ツが来ない、昨日も今日も…
マグダラのマリアのことは何と書いてあるかしら？
「おみ足に跪き、そして泣きながらおみ足に接吻し、
そして涙にて濡らし、そして香油を塗り…」
主よ！ 私を香油を塗りとうございます——
主よ！ あの女を憐れむのなら、
私のことも憐れんでくださいまし！…

はいどう、はいどう、はいどう！

作曲：1788年8月10日／初演：不明／演奏時間：約40分

王者の風格もつ最高傑作

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は、最後の三つの交響曲(第39番、第40番、第41番)を1788年の6月末から8月にかけてのわずか2か月で完成させた。1781年にウィーンに移り住んでから、モーツァルトの交響曲の作曲はぐっと減ってしまったが、再び量産するようになったのには、何か理由があるのだろうか。知人に借金を申し込む手紙を書いたのもこの年だが、実際にはそれほど困窮していなかったようだ。近年の研究では、ウィーンもしくはイギリスでの演奏、または曲集としての出版が最初から意図されていたという仮説が立てられている。いずれにしてもモーツァルトの全交響曲のなかでも最高傑作とされるこれら3曲は、それぞれ異色の、個性輝く作品となっている。

第41番は〈ジュピター〉の愛称で親しまれているが、これはモーツァルト自身によるものではなく、ハイドンをロンドンに招聘した^{しょうへい}ことでも知られる、ヴァイオリン奏者で興行師のザロモンによって名づけられた。ギリシャ

神話最高神ゼウスの英語名「ジュピター」の名にふさわしく、王者の風格をもつ華麗で厳格な交響曲である。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ
ハ長調、ソナタ形式。全楽器で堂々と
ハ長調の主音（ド）を3回強調して始
まる。祝祭的な雰囲気 で力強い第1主
題と歌うような第2主題が示される。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ
へ長調、ソナタ形式。典雅で繊細な音楽が穏やかに流れる。ヴァイオリンで優美な第1主題が奏でられ、暗く陰りある部分を経て第2主題が現れる。

第3楽章 メヌエット:アレグレット、ハ長調 壮麗で軽やかな舞曲。冒頭の半音階で下行する音型が特徴的。中間部で終楽章の主題の音型が先取りされる。

第4楽章 モルト・アレグロ ハ長調、ソナタ形式。「ジュピター音型」と呼ばれるド・レ・ファ・ミから始まる第1主題が何度も現れて全体を統一する。のびやかな第2主題。コードでは第1主題がフーガ風の模倣書法で圧巻の展開をみせる。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

4.23 [土]

4.24 [日]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

オネゲル
パシフィック 231

作曲：1923年／初演：1924年5月8日、パリ／演奏時間：約7分

疾走する機関車の様子描く

アルチュール・オネゲル (1892～1955) はスイス人の両親のもとに、フランスで生まれた。チューリヒ音楽院で2年間学んだのち、パリ音楽院に入学。学友には、のちに同じ「フランス6人組」としてともに活動したミヨーもいた。「フランス6人組」の中で、彼は独特である。ミヨーやプーランクらは、古典的な明晰さを求めていったのに対し、オネゲルは複調的な表現と対位法を駆使し、ドラマティックなまでに重く深い情感にあふれる作品を書き上げた。有名なオラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉は劇的な表現に満ちている。

1923年に作曲された〈パシフィック 231〉も、オネゲルの代表作。彼は機関車をこよなく愛しており、この作品では疾走する機関車の様子が描かれ

ている。タイトルの「231」は、フランスでの機関車の車輪の配置の呼び方で、すなわち前輪＝2軸、動輪＝3軸、後輪＝1軸である。

序奏ではずっしりとした機関車が重々しく走り始める様を、弦楽器のトレモロやシンバルなどが表す。機関車が徐々に速度を上げるとともに、さまざまな楽器が加わってゆく。主部に入ると、音楽は音価 (音符の長さ) やリズムを細分化し、激しくなる機関車の動きや力強さを表している。

オネゲルの言葉によると、この作品の最後の部分は、「時速120マイル」で「300トン」の機関車が爆走する場面が、エネルギーに表現される。作品は、完成した翌年にパリのオペラ座で初演され、クーセヴィツキーが指揮している。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器 (テナードラム、シンバル、大太鼓、銅鑼)、弦五部

グリーグ
ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

作曲：1868年／初演：1869年4月3日、コペンハーゲン／演奏時間：約30分

「北欧のショパン」の壮麗な技巧

ノルウェー生まれのエドヴァルド・グリーグ (1843～1907) は、15歳の時にライプツィヒ音楽院に留学。この音楽院は、ヨーロッパ中の才能豊かな音楽家の集う最高峰の専門機関であった。また、ライプツィヒは古くはバッハが活躍し、シューマンやメンデルスゾーンも長く暮らした都市で、名門ゲヴァントハウス管弦楽団の本拠地でもある。グリーグはその地で作曲やピアノを学び、4年後の1862年に帰国するも、新たな環境を求めてデンマークへ移り住んだ。首都コペンハーゲンで、同郷の作曲家リカルド・ノルドローグ (1842～66) と出会う。グリーグは、ノルドローグを通してノルウェーの民族性に覚醒し、その成果は〈ノルウェー民謡に基づく2つの即興曲〉をはじめとした、ノルウェー民謡や舞曲を題材とした作品に反映されている。

ハンブルクに留学経験のある母からピアノの手ほどきを受けたグリーグは、詩情あふれるピアノ作品を数多く残し、「北欧のショパン」と呼ばれている。1866年にデンマークから帰国したグリー

グは、翌年にピアノ協奏曲作品16を作曲。彼が非常に優れたピアニストであったことを示すように、この作品においてもピアノ・パートは壮麗で華やかな技巧に彩られている。また、グリーグがライプツィヒで学んだドイツ・ロマン派の表現語法を^{いしずえ}礎とし、透明感あふれる表現や繊細な語法など、グリーグの独自性が発揮された作品である。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート イ短調。独奏ピアノによるなだれ落ちるようなパッセージに続き、素朴な響きの第1主題を木管楽器が軽やかに奏でる。第2主題はハ長調で、ピアノとチェロが叙情豊かに歌い上げてゆく。**第2楽章** アダージョ 変ニ長調。弦楽器による主旋律はこの上なく美しい。音楽は終わることなく、そのまま第3楽章へと続く。

第3楽章 アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート イ短調。独奏ピアノは、大きなパッセージを奏でたのち、舞曲風のロンド主題を表す。躍動的で清^{せい}冽ながらも壮大なスケールのフィナーレ。

楽器編成／フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー 交響曲 第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉

作曲：1893年／初演：1893年10月28日、ペテルブルク／演奏時間：約46分

静寂と諦観に包まれたフィナーレ

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は1876年、ロシアの大富豪メツクの未亡人から経済的な支援の申し出を受けた。彼はモスクワ音楽院で教職に就きながら、創作に勤しんでいた。ピアノ協奏曲第1番などを書き上げるも、作品への無理解に苛まれた彼に対し、メツク夫人は彼の作品を高く評価し、作曲に専念するようにと年給の支給を申し出たのである。彼女はチャイコフスキーと面会することなく文通のみで交流するとともに、経済的に彼を支えた。

1890年、その支援は突然に打ち切られる。しかし、その後もチャイコフスキーは作品を世に送り出した。1892～93年のヨーロッパ旅行のさなか、彼は交響曲第6番〈悲愴〉のいくつかの部分の着想を得る。彼は1893年2月にスケッチを始め、ひと月ほどでおおよそを書き上げたのち、この曲の創作を中断。夏に再開され、8月に完成し、10月28日の初演には彼みずから指揮台に立った。ところがその9日後、チャイコフスキーは突然この世を去る。彼の死因については、

はっきりしたことは分かっていない。

なお、タイトルの〈悲愴〉は、自筆譜の表紙に「悲愴的交響曲」と記されたことに由来する。

第1楽章 アダージョーアレグロ・ノン・トロppo ロ短調。陰うつな序奏に続き、音楽は主部に入る。ヴィオラによってむせび泣くように奏でられる第1主題、そして第2主題はニ長調に転じて、ヴァイオリンとチェロが平安に満ちた調べを奏でる。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア ニ長調。ロシアの民族色を感じさせる5拍子のワルツ。彼が得意としていたワルツのスタイルを取り入れている。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ ト長調。スケルツォ楽章にあたる。スタッカートによる生氣あふれる主題が印象的。

第4楽章 フィナーレ：アダージョ・ラメントーソ ロ短調。それまでの交響曲の伝統に反し、緩徐楽章を最終楽章に置き、第1楽章のドラマティックかつ悲哀を帯びた楽想を再現した。静寂と諦観に包まれたフィナーレ。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、タムタム）、弦五部

4.29 [金・祝]

4.30 [土]

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1838～1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分

古典的均整美とロマンティシズム

哀愁を帯びた冒頭の主題で知られる、屈指の人気ヴァイオリン協奏曲。ドイツ初期ロマン派を代表する作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）が円熟期にあたる35歳の年に完成させた。

彼は1838年、自身が常任指揮者を務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターで友人のフェルディナンド・ダーヴィトのために作曲を始めた。だが創作は難航し、ダーヴィトの助言を仰ぎながら、1844年9月によりやく完成。翌年3月に初演された。

主な特徴は、全楽章が切れ目なく演奏される点と、それまでは第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者任せだったカデンツァが、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にある。雰囲気（きふく）の継続と一貫した曲調を狙ったこれらの発想は、当時のヴァイオリン協奏

曲としては革新的だった。

曲は、古典的な均整美と甘美なロマンティシズムが溶け合った名品。独奏者はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露する。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッショナート。独奏が2小節目から登場する意外性十分な始まり。そこで弾かれる第1主題と、木管に出る第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で第2楽章へ移る。

第2楽章 アンダンテ。叙情的な歌が流れゆく緩徐楽章。中間部は荘重な趣が漂う。

第3楽章 アレグレット・ノン・トロppoアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。短い経過部から二つの主題が軸を成す主部へ移り、華やかな音楽がテンポよく繰り返される。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

マーラー 交響曲 第1番 ニ長調 〈巨人〉

作曲：1884～1888年／初演：1889年11月20日、ブダペスト／演奏時間：約53分

「青春の苦しみや情熱」を内包した人気作

グスタフ・マーラー（1860～1911）は、今や大人気作曲家だ。しかし、生前は指揮者としての名声が圧倒的にまさっていた。彼は未完の第10番と〈大地の歌〉を含めて11曲の交響曲を残したが、当時の評価は終始今ひとつ。反対に指揮者としては、ウィーン国立歌劇場で歴史的な成果を挙げ、晩年はニューヨークのメトロポリタン・オペラでも活躍した。交響曲第1番〈巨人〉は、そこに至る前、各地の歌劇場で実績を積み上げていた頃に書かれた、青春の記念碑ともいべき作品である。

現チェコのボヘミアの小村に生まれたマーラーは、ウィーン音楽院を卒業後、1883年からカッセル、86年からライプツィヒ、88年からブダペスト、91年からハンブルクの各歌劇場で指揮者を務めた。その初期にあたる84年頃、歌曲集〈さすらう若人の歌〉の作曲を開始。この曲は、恋愛体験に基づく自作の歌詞によって、失恋した若者の悲しみと絶望を描いた曲だった。そして直後に、同歌曲集の旋律も用いた本作を、並行して書き始めた。

曲は1888年に完成。翌89年にブダ

ペストで初演された当初5楽章から成る交響詩だった。次いで93年にハンブルクで改訂版を初演。その際および翌年ヴァイマルでの演奏時に、交響詩〈巨人〉と題され、各部分に以下の標題が付けられた。この中で、2曲目の「花の章」以外が現在の第1～4楽章にあたる。

第1部「青春の日々から～花、果実、^{いばら}茨」

1. 果てしなき春
2. 花の章
3. 帆に風をはらんで

第2部「人間喜劇」

4. 座礁、カロの画風による葬送行進曲
5. 地獄から天国へ

〈巨人〉のタイトルと各標題は、主にドイツの文学者ジャン・パウルの教養小説から採られたもの。カロはフランスの銅版画家で、ここでは林務官の^{ひつぎ}棺を運ぶ森の動物たちの葬列の絵がイメージされている。これを見ると当初、本作には文学的な意味合いが含まれていたことがわかる。

マーラーはその後、さらに改訂。96年には〈巨人〉を含むすべての標題と「花の章」を外して4楽章の交響曲とし、

細かな改訂を加えて99年に出版した。つまり彼は、最終的に物語性のない純粋器楽曲として完成させた。しかも、ジャン・パウルの小説には天才や巨人主義に反対する思想が盛り込まれており、〈巨人〉のタイトルは誤解を招くこと必至。それゆえ外されたのだが、もはや定着した今は、あくまでニックネームとして捉えておきたい。ただこうした経緯からみて、本作が標題性を内包し、「青春の苦しみや情熱」「愛への失望や憧憬」「苦悩から勝利へ」などの内容が、大なり小なり表現されているのは確かだろう。ちなみに、マーラーの弟子の指揮者ブルーノ・ワルターは、この曲を「マーラーのウェルテル」と称し、ゲーテの「若きウェルテルの悩み」と同質の作品とみている。

曲は、4管を基本とし、ホルンを7本用いた大編成による、大スケールの音楽（それでもマーラーの交響曲の中では小規模で短い）。マーラーを特徴づける民謡、童謡、軍隊調の旋律を含めたさまざまな素材を織り交ぜながら、ダイナミックレンジの広いサウンドが展開される。また、冒頭部分で奏される4度の下降音型が、全曲を通じた柱となる。

第1楽章 ゆるやかに、ひきずるように～常に大いにくつろいで。「自然の音のように」と付された弦楽器の高音

の持続音で始まり、管楽器が4度の下降動機を奏する。カッコウの鳴き声や遠くからのトランペット（通常は舞台裏）のファンファーレなども聴こえた後、チェロが第1主題＝〈さすらう若人の歌〉の第2曲“朝の野辺を歩けば”の旋律を提示して主部に入る。細かい動きの第2主題を加えて叙情的に進行し、最後は輝かしい高揚に至る。

第2楽章 力強い動きをもって、しかし速すぎずに。3拍子の農民舞曲風の音楽によるスケルツォ楽章。柔らかなワルツ風の間奏部が挟まれる。

第3楽章 荘重に威厳をもって、ひきずることなく。主部は葬送行進曲。ティンパニの4度下降動機に乗ってコントラバスがソロで奏する主題は、ボヘミアの俗謡「マルティン兄さん」（フランスでは「フレール・ジャック」）を短調化したもの。中間部では〈さすらう若人の歌〉の第4曲“ふたつの青い目が”が優しく奏されるほか、多彩な要素が交錯する。

第4楽章 嵐のように激動して。急－緩－急－緩－急の構成がなされた長い楽章。シンバルの一撃を合図に激的な音楽が開始。束の間の安らぎを挟みながら、起伏の激しい展開を続け、第1楽章の主題も回想されつつ、熱狂的な歓喜を迎える。最後の部分はホルンが起立して吹くよう指示されている。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、弦五部